漢籍語「爆撃」の語誌変遷について

——「爆発」、「炸裂」から「爆弾攻撃」への転用経緯

仇　　子　　揚

The evolution of word usage with the Sino-Japanese word "Bakugeki"(爆撃)

– The process of "Blast", "Explode" changing to the new meaning: "bomb attack from planes"

QIU Ziyang

The word "Bakugeki" (爆撃) in Japanese is a classical Chinese word and is seen in documents of the Ming dynasty. And at that time it means "Blast" and "Explode". But From the 20th century, it changed into the new meaning of "bomb attack from planes" in modern Japanese.

Likewise, In the 1920 s to 1930 s in China, this words was also used with the new meaning as the one above-mentioned. Such as "Air raid" (空中爆撃), "bomber" (爆撃機), so it is able to be treaded as a loanword from Japanese. But after a short time, This word was replaced with another Chinese word "轟炸". So it was not remained in modern Chinese.

Thus, this paper focused on the Sino-Chinese "Bakugeki" (爆撃), will conduct a study of its route of exchanges between Chinese and Japanese, and research the evolution of word usage and the impact related, to solve the question of "why didn't this word remains in modern Chinese".

キーワード：新漢語、漢籍転用語、語誌考証、日中語彙交流、漢語の逆輸入、
中⇒日⇒中伝播ルート

はじめに

近代日本における新漢語の多用に関する研究は周知のようにすでに大きな成果が挙げている。中でも特に新語の成立と変遷そして中国へも伝播、共有される現象などに注目し、その伝播ルートをめぐる考

察が多く見られる。さらに、ここ数年では、荒川（1997）[1] における「熱帯」、沈（1994）[2] における「関係」、「影響」などのような「もともとの中国語に存在した語彙が日本で一般化し、再び中国へ還流した」パターンに属する漢語に焦点をあてた研究も盛んに行われ、大きな成果が挙げられた。

そこで、本稿は、「爆弾攻撃」という航空機が用いられる前の時代には存在していない、新概念を表すために古典漢籍から転用してきた語である「爆撃」を例に、当漢語の語義の変遷を考察した上で、中国語への影響を解明することを目的とする。

1　現代辞書の語義付け確認

現代日本語における「爆撃」の語義について、まず『日本国語大辞典』（以下『日国大』に略す）第２版[3] では,「(1)爆発して、周囲に衝撃を与えること。(2)飛行機から爆弾・焼夷弾・ロケット弾などを投下して相手を攻撃すること。爆弾攻撃。」と記述している。そして、出典部分では、(1)について『窮理通』（1836)、(2)について『朝日新聞』（昭和二〇年（1945）八月八日）および『遙拝隊長』（1950 井伏鱒二）がそれぞれ挙げられている。

一方、現代中国語の場合、日本語の「爆撃」の意味に相当する語としては「轟炸」[4] が使われるのが一般的だが、『漢語大詞典』（以下『漢語大』に略す）では「爆撃」という語が収録されており、その語義では「(1)横向爆破。(2)轟炸。」と記述していることから、基本的に日本語と同義であると思われる。

そして、その出典について、(1)は明代の文献である『天工開物』・火薬料、(2)は魯迅の作品である『偽自由書』が挙げられたことから、まず前述の『日国大』の(1)に相当する（爆発、炸裂すること）用法は中国から日本に伝わったことがほぼ確実である。(2)の用法（爆弾攻撃）について、筆者の調査によれば近代日本で先に新義に転用された可能性が十分あり（後述)、また現代中国語において「爆撃」という語自体の使用率が高くない（前述のように「爆弾攻撃」を意味する語として基本「轟炸」が使われている。さらに、出典(2)に挙げられたのは魯迅の作品であることも留意すべきだと思われる。なぜなら、周知のように、魯迅の文章における語彙使用は日本語の影響をよく受けているからである）ことから、「爆撃」という語の伝播ルートは、基本的に中⇒日⇒中のパターンに当たるのであろう。

要するに、日本は漢籍由来の中国語である「爆撃」に新たに近代的な意味「爆弾攻撃」を付与させ、中国ではその影響を受け、一時的に同じように転用した新語である「爆撃」を使うようになったが、後には中国固有語の「轟炸」に置き換えられたものと思われる。

よって本稿では以下の章をもって、日中両言語における「爆撃」の意味用法の変遷経緯を明らかにし、当漢語をめぐる両言語間の伝播ルートを考察し、この語の伝播交渉によって引き起こされた付随的な影響に触れたい。

1）荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播　地理学用語を中心に』（白帝社，1997）

2）沈国威『近代日中語彙交流史　新漢語の生成と受容』（笠間書院，1994，新装版 2008）

3）ジャパンナレッジLib（http://japanknowledge.com/library）が公開しているものに準ずる。（最終確認日：2016･11･14）

4）『日中辞典』第２版（小学館，2002）および『中日辞典』第２版（小学館，2003）の記述による。

2　中国固有語としての「爆撃」の用例

既に述べたように、「爆撃」は、現代中国語としてはほぼ使用されず、死語に近い存在であるが、前述の『漢語大詞典』に挙げられた『天工開物』の例と同じように、明代の兵書における火薬の製造と使用法を記録した部分からも「爆撃」の用例が発見できる。そこで、漢籍データベース『中国基本古籍庫』[5]を利用し、まず中国古代語としての「爆撃」の用例を以下に挙げて、その意味用法の確認を行う。

（用例、出典文献、（下線部分の筆者訳）の順、以下同。なお、全用例の下線は筆者による。）

(1)　而兵可移其埋器利於爆撃、易碎、火烈而煙猛。　明『兵録』巻十一／明『武備志』巻一百二十一軍資乗火（訳：爆破作業に有利する）

(2)　硝九而硫一、性横者、主爆撃。　明『兵録』巻十一（訳：主に爆破として使う）

(3)　小爆撃之、以亂賊心。　明『武備志』巻一百三十軍資乗火（訳：少し爆破法を使い爆発させ）

(4)　惟其行法更猛能猝然爆撃　清『時務通考』巻九兵政九（訳：突然爆発させることができる）

(5)　銅片爆撃、傷死者數十。　清『三洲日記』巻一（訳：銅の破片が爆発によって飛び散る）

上記の５例のように、中国の古籍資料における「爆撃」の用例は、遅くとも明の時代から使用され始め、用例数少ないものの、ほとんど「爆発する、炸裂する」のような意味として使用されていると見られる。また、その語の創出理由としては、恐らく拙稿である仇（2015）[6]で論じたように、明の時代における兵学の革新、火薬兵器の活用のような歴史背景と深く関わっているものであると見られる。従って、初期語例が見られる明代の文献の大多数が兵学、火薬製造関連のものである理由もわかるだろう。そして、例(4)(5)に示されているように、清代後期になっても、その変化を認めることができないのである。

続いて、英華字典類の資料[7]を利用しその関連語彙を検証してみたい。なぜなら、英語のblast、explodeは一般的に前述の「爆発する、炸裂する」の意味に相当し、漢訳語として当時ではその類義語である「爆撃」が使われていた可能性が想定できるからである。

しかし、本稿の調査によれば、英華字典類におけるblastの訳語としては「轟聲」、「爆聲」、「暴風」など、explodeの方としては「爆散」、「轟散」、「發爆」などがそれぞれ多く挙げられるが、「爆撃」が訳語として充てられた語例は一件も見られず、宣教師による訳語造語としては用いられていなかったであろう。以上のことから、近世中国における「爆撃」の意味は一貫しており、特に外来語の影響などを受けたことがなく、近代以降の日本語と接触するまで元来の意味を保っていたと判断される。

５）北京愛如生数字化技術研究中心編『中国基本古籍庫』データベース（関西大学アジア文化センターよりアクセス　最終確認日：2016･11･14）、以下『古籍庫』に略す。

６）仇子揚「日本近代軍事用語の成立に資する漢籍とその語彙」（『或問』第28号，2015）（p.120）

７）中央研究院近代史研究所近代史数位資料庫・英華字典（http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php）のデータに準ずる。（最終確認日：2016･11･14）

3　日本への伝来および近代に至るまでの用例

1章で述べた通り、『日国大』における「爆撃」に関しては、出典として『窮理通』(1836)[8] に挙げられているが、現時点の調査ではそれ以外の近世文献から用例を発見することができず、「爆撃」という語がいつ日本伝来したのか、まだ不明であると言わざるを得ない。しかし、同じく仇（2015)[9] にも論じたように、江戸時代は兵学の研究が盛んでおり、漢学者などによって中国明代の兵書を多く受け入れた時代背景から、遅くとも江戸中期には漢籍（前述の兵学書の可能性が特に高い）を通じて日本へ伝わっていたと判断される。

従って、『日国大』においてすでに出所が判明できる『窮理通』の用例はいかなるものかを検証して見よう。該当文献の作者である帆足万里の著作が網羅されている『帆足万里先生全集』[10] を用いて「爆撃」の語例を調べた。その結果、特に『窮理通』の巻四は使用例が集中していることを明らかになり、代表的な用例として以下のものが挙げられる。

(6)　導雲中虎魄力、漸次下行、使無爆撃。　（訳：爆発させないように）
(7)　其由火炙摩拶諸法、発爆撃。　（訳：爆発させる）
(8)　雷金藉薬力、使金質鬆解、以便生火、至其爆撃。　（訳：爆発に至る）
(9)　盛雷金、或置之飛揚灰鹽溶液中、二物合和、以成爆撃之力也。
（訳：爆発して衝撃力を生成させる）
(10)　雷金爆撃之力、由飛揚灰鹽分解而生也。　（訳：爆発によって生成された衝撃力）
(11)　以腐蝕灰鹽烹之、紙條攪動、亦発爆撃。　（訳：同じく爆発に誘発させる）
(12)　如諸金状有輝光、不甚透明、纔摩拶必発爆撃。　（訳：必ず爆発に至る）

上記の例のように、『窮理通』における「爆撃」は従来の漢語の意味と同じように理解されていると見られる。当時の時代背景も合わせて、漢文で書かれていた作品であるから、中国語の原義を厳守とする作者の努力が見られるのであろう。

8）自然科学書。理学者帆足万里（ほあしばんり）の著。全8巻。1810年（文化7）ごろ初稿を完成、しかし誤謬（ごびゅう）ありとして自ら破棄、35年（天保6）新たに執筆に入り、翌年いちおう完成するが満足せず、42年ごろも執筆を続けた。結局生前には公刊されず、没後、56年（安政3）に一部公刊された（ジャパンナレッジLib（http://japanknowledge.com/library）・日本大百科全書（ニッポニカ）の解説による）。

9）仇子揚「日本近代軍事用語の成立に資する漢籍とその語彙」（『或問』第28号，2015年）（p.121-124）は、大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所研究叢刊，1967）のデータに基づき、中国伝来兵書の記録およびそれによる江戸時代の兵学思想への影響について論じている。

10）『帆足万里先生全集』（帆足記念図書館，1926）。上巻は作者である帆足万里の年譜、小伝およびその墓碑銘、著作である『入学新論』、『東潜夫論』、『窮理通』、『井楼纂聞』、『巌屋完節志』、『修辞通』、『仮名考』、『医学啓蒙』、『三教大意』などを収録。下巻では『大学』標註、『論語』標註、『孟子』標註、『中庸』標註、『書経』標註、『周易』標註のような漢籍注釈書を収録。本稿は国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/）（以下「国会図書館」に略す）所蔵のものを参照した。

そこで、作者である帆足万里について少し調べてみたい。万里は江戸後期の1778年、豊後国日出藩家老の家に生まれ、後には有名な儒学者、経世家として知られ、その漢学の造詣が相当深いと思われる。村田（1963）[11] によれば、「日々唐本を読むこと高さ二寸、文を属すること数百千言」と言われるほどの人物であり、同じく村田（1963）には、

> 『窮理通』は五十九才の時のもので初期の著述であることを考えるとき相当これには力を入れたものと思われる。（中略）その著書は経史、仏典、諸子百家、政治、天文、物理鉱物、医学、数学と非常に範囲が広く。

とあるような評価も見られる。以上の説から考えると、まずこのような著作の完成は洋学の知識も十分でないと完成できないと考えられる。そして、漢学と洋学との接点については、次の岸田（2010）[12] に述べられたように理解すればよいだろう。

> 洋学は漢訳洋書を読むことから始まった。そのため、最初から漢文力が必要とされた。また、基礎的学識は漢文で得られるという共通認識は、洋学をこころざすものにも存在していたと思われる。漢文を学ぶには儒者が開く漢学塾に通う。

一方、前述のように「爆撃」という語の漢籍出典のほとんどは兵学、火薬関係の文献であることから、漢学と兵学との接点も無視できないと考えられる。

その点について、前田（2006）[13] では江戸時代は、兵学の研究が盛んであったことが以下のように主張されている。

> 近世日本には、数多くの『孫子』注釈書が書かれた、それらは、もちろん純然たる兵学者によって書かれたものもあるが、そのほとんどが儒者によって書かれていた。そのなかには、朱子学者（林羅山・新井白石・山口春水）、徂徠学者（荻生徂徠）、仁斎学者（河田東岡）、折衷学者（伊藤鳳山）などが含まれ、儒学の学派の違いを越えていた。

さらに例(3)の出典文献である『武備志』は代表的な明代兵学書のため、江戸の日本にも流布したと論じられている。

要するに、「爆撃」のような漢語は兵学や火薬関係の語彙が漢籍兵書によって日本に伝わり、そして漢学者の著作に用いられた可能性が高いと考えられる。『窮理通』は漢学と洋学の両方の造詣が深い帆足万里により著されているため、漢籍文献の影響を十分受けた可能性があり、その理由で「爆撃」という漢

11）村田三良「窮理通（帆足萬里著）について」（大分県立芸術短期大学研究紀要２，1963）（p.53）
12）岸田知子『漢学と洋学：伝統と新知識のはざまで』（大阪大学出版会，2010）（p.37）
13）前田勉『兵学と朱子学・蘭学・国学　近世日本思想史の構図』（平凡社選書，2006）（p.74, 76）

語が活用され、例(6)～(12)のような洋学の知識概念が反映されていると思われる。

以上のことから、漢籍語から近世日本語までの「爆撃」は、「爆発する、炸裂する」の意味から脱却することがなく、明確な変化を認めることができないものであると言えよう。しかし、例(6)(7)(11)のように、日本語にはサ変動詞というような名詞／自動詞から他動詞への変換可能な語彙システムが存在しているため、「爆撃の現象（名詞）→爆撃（爆発）させる→（他動詞としての）爆撃する＝後の爆弾攻撃の意味」への転換が可能であると見られ、後の現代語の意味が成立に繋がるのであろう。

4 「爆弾攻撃」という新義への道

まず、近代明治初期における訳語辞書類および漢語辞書類を参照し、前述の『日国大』の語義(1)に相当したもの、つまり2章に述べた「爆発」、「炸裂」のような類義語およびその現代英訳であるblast、explodeに関する辞書の記述を調査した。その結果の一部は表-1として例示しておく。

表-1の例のように、「爆発」、「破裂」のほか、「強打ツ」、「打チ崩ス」のような表現、または「衝撃波」の意味に相当したと思われる「暴風」、「疾風」などが訳語として充てられたことが確認できるが、「爆撃」の用例はすべて未見で、明治初期の翻訳語として起用された可能性が低いと考えられる。

表-1 『英和対訳袖珍辞書』[14] および『附音挿図英和字彙』[15] におけるblast、explodeの訳語例

辞書名	辞書項目	記述
英和対訳袖珍辞書（1862）	Blast, *s.*	風. 疾風. 発声. 響. 破裂スル. 打チ崩ス. 傷ツケル. 荒ス. 空ス. 烈シク
	Blast-ed-ing, *v.a.*	撃ツ. 枯ラス. 仕損シ. サセル
	Explode-ed-ing. *v.a. el n.*	追返ス. 破裂サセルハ子除ケル. 譏ル. 見捨ル. 破裂スル
附音插図英和字彙（1873）	Blast, *n.*	一陣風、暴風、吹管ノ音、響、爆発、殺気、轟声
	Blast, *vt.*	枯ス、打毀ス、害スル、暴ス、驚カス、混雑スル、失計ガスル、強打ツ、爆発ガスル
	Explode, *vi.*	爆ル、破裂スル

一方、辞書以外におけるそのような例は『朝日新聞』[16] にも見られる。

(13) 清国擾乱見聞録 朝陽東直両門の爆撃『朝日新聞』(1900/8/30 朝刊)

しかし、用例自体は上記の例(13)のような極少数なものに留まる。その例の文脈から見れば、恐らく「爆薬を使って爆発させる」=「爆破する」という意味だと思われる。前章最後に述べたように、全く別の意味への転換ではないものの、サ変動詞による活用現象が見られるだろう。

14) 堀達之助『英和対訳袖珍辞書』(1862)。本稿は杉本つとむ『江戸時代翻訳日本語辞典』(早稲田大学出版社, 1981,『英和対訳袖珍辞書』の翻刻影印本）の記述を参照した。

15) 柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』(日就社, 1873)。本稿は国会図書館所蔵のものを参照した。

16) 朝日新聞記事データベース「聞蔵IIビジュアル」(http://database.asahi.com/library2 最終確認日：2016･11･14)

つまり、明治以降の時代になっても「爆撃」という語も基本的に元来の意味を保っていたと思われる。しかし、1910年代以降、航空機の戦争への投入をきっかけとして状況は一変したと見られる。特に、1915年前後、第一世界大戦が勃発、戦争関連の報道が急増になると、新聞記事からは「爆撃」の語例が多く見られるようになった。以下、数例を挙げてみたい。

(14) バルナの爆撃（タイトル）『日本実業新報』(227)（1914/9）
(15) 英国飛行機一隻スミルナのブールラ要塞を爆撃し、守備隊中に七十名の損害を生せしめたり。『朝日新聞』(1915/6/29 朝刊)
(16) 六十五隻の聯合軍側飛行機はツエーブルッゲを爆撃し、敵に多大なる損害を興へ無事帰還せり。『朝日新聞』(1916/3/22 朝刊)

その中で、例(14)における「爆撃」の使用はタイトルのみであり、記事本文のにおける用例は見られなかったが、文中には「今飛行船の爆弾投下の一節を左に紹介す」というような一節があるため、その「爆撃」は「爆弾投下」を表現する語として使われていることがわかる。また、『朝日新聞』における同年代の記事は、「爆撃」という語を使われていないものの、以下のような表現を使っている例も見られる。

(17) 我飛行機爆弾投下、些の損害なし。『朝日新聞』(1914/9/6 号外)
(18) 十六日、山田大尉大崎中尉は一飛行機にて敵港を偵察し、且艦艇無線電信所発電所等に爆弾攻撃を加へ。『朝日新聞』(1915/3/30 朝刊)

以上のことから、前述の『日国大』の語義(2)、つまり「飛行機などによる空襲」の意味、または英語にいう bombing、bombardment に相当する用法への転用した最大の直接な理由としては、恐らく例(17)(18)における「爆弾攻撃」、「爆弾投下」如き表現の多用、その略語にあたる「爆撃」が新たな意味を付与されたではないかと考えられる。

また、そのような転用が成立した後、「爆撃実験」、「爆撃機」、「空中爆撃」のような派生語の使用例も1920年代以降の文献から見られ、具体例として例(19)～(21)が挙げられる。

(19) 陸海軍聯合の下に行はるゝ第一次の爆撃実験に関する計画の全部に就ては（以下略）『有終』8（1921）[17]
(20) 空中爆撃の実演―オストフリースランドの撃沈。『有終』8（1921）[18]
(21) 其の艦載爆撃機を以て首都を攻撃する事（中略）我が都市を攻撃する事はあり得べき脅威として覚悟して居らねばならぬ事実である。『航空の知識』(1926)[19]

17)『有終』8（7）(94)（海軍有終会，1921-07）(p43)。本稿は国会図書館所蔵のものを参照した。
18)『有終』8（10）(97)（海軍有終会，1921-10）(p44)。本稿は国会図書館所蔵のものを参照した。
19) 天野修一『航空の知識』(博文館，1926)（p160)。本稿は国会図書館所蔵のものを参照した。

そのほか、近代雑誌資料コーパス調査をおこなったところ、1920年代以降の『太陽』(1925)[20] からはじめて「爆撃」およびその関連語彙の用例がられるようになり、それ以前では全て未見である、というような結果が示されている。

本章冒頭で述べているように、これまでの調査では、明治時代の漢語辞書及び訳語辞書類から「爆撃」の収録例が発見できず、辞書を通して近代初期までの日本語における「爆撃」の明確な語義付けはまだ把握できてないが、上記の新聞記事や雑誌などで多用され、関連の派生語も出現した1920年代以降、「爆撃」は新語として兵語辞書類[21] にいち早く収録されるようになったことが確認できる。

例えば、『兵語新辞典』(1928)[22] は「爆撃」およびその派生語である「爆撃飛行隊」を両方収録していた。その語義解釈を示すと以下のとおりである。

> バクゲキ［爆撃］爆発物を使用して攻撃すること。
> バクゲキヒコータイ［爆撃飛行隊］之には軽爆撃隊、重爆撃隊とあって、軽爆撃隊は其性質上遠距離飛行及び夜間飛行に適していないから昼間三四千米の高度から術工物、活動目標等に対して爆撃を行ふもので、尚地上戦闘が酣なときには低空飛行を行って機関銃で地上戦闘に参加することがある。重爆撃隊は機体が大きくて行動が鈍重であるから主として夜間飛行を行って遠距離の敵の補給機関、交通線、術工物、飛行場、宿営地、橋梁、重要都市等を爆撃し又夜間の偵察に任ずるもの。
>
> 『兵語新辞典』(1928)

その「爆撃」自体の語義付けは「爆発物を使用して攻撃すること」というような「何を使ってどのように攻撃するか」に明確に言及されていないものの、「爆撃飛行隊」の方では「重要都市等を爆撃し」という「飛行機による空爆」の意味に相当する表現を使って説明していたことがはっきり見られる。従って、該当例文に記された「爆発物」もただの「爆薬」ではなく、「航空爆弾」であると理解することができ、「爆弾攻撃」の意味であると判明できるだろう。

また、次の表-2に挙げた例の通り、英語訳への対応変化も同じ1920年代からはっきり見られるようである。

20）本稿は国立国語研究所編「中納言」・日本語歴史コーパス（https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search　最終確認日：2016･11･14）のデータを参照した。

21）明治中期から昭和初期までに渡って多く出版された軍事用語（兵語と称される）収録を目的とする専門辞書、またその資料群である。

22）『兵語新辞典』（大日本教育通信，1928）。本稿は国会図書館所蔵のものを参照した。

表－2　『英和陸海軍兵語辞典』（1910）[23] と『新英和大辞典』（1929）[24] における関連訳語の比較

辞書名	辞書項目	記述
『英和陸海軍兵語辞典』（1910）	Bomb, *n.*	爆弾，爆発弾
	Bomb, *v.t.*	爆発す，砲撃す
	Bom'bard, *n.*	砲撃
	Bom-bard', *v.t.*	砲撃す
	Bom-bard'ment, *n.*	砲撃
『新英和大辞典』（1929）	Bomb, *n* & *v.t.*	1. *n.* 爆裂弾，爆弾；火山の飛石. 2. *v.t.* & *i.* 爆弾で攻撃する，爆弾を投下する. *bombing* (*or bomb*) *plane* 爆弾投下飛行機，爆撃機
	bom-bard', *v.t.*	砲撃する；（質問などで）攻撃する.
	bom-bard'ment, *n.*	砲撃

前頁でも述べた通り、現代日本語の場合、普通「爆撃」をbombing、bombardmentの訳語として充ててもよいと判断できるが、飛行機などが活用される前の1910年代前半頃は普通『英和陸海軍兵語辞典』（1910）の記述例のように、むしろ「砲撃」がその主な訳語に当たることが一般的である。飛行機が活用されていない時代、『兵語新辞典』（1928）にいう「爆発物を使用して攻撃する」手段を言えば普通大砲であるため、「砲撃」に訳されることは当然と言えば当然である。しかし、1920年代以降には前述の「飛行機による爆弾攻撃」＝「爆撃」の概念が普及されてきたため、『新英和大辞典』（1929）のようなBombを「爆弾で攻撃する」、bombing planeを「爆撃機」にそれぞれ訳す方法が現れ、新義としての「爆撃」への変身を示唆していると思われる。

そして留意すべき点としては、『英和陸海軍兵語辞典』（1910）は前述の兵語辞書類に相当するもので、文字通り軍事関連用語のみを収録する専門辞書ということであり、用語の説明は普通より詳しいのである。それに対して『新英和大辞典』（1929）の方は一般的な総合辞書である。にもかかわらず、逆に後者の方から新義の用法が見られ始めたことは、後者の時代である1920年代からその新義が普及されてきたことが一層確信できるだろう。

以上のことから、1920年代以降における「爆撃」はすでに『日国大』の語義(2)に相当した語義である「飛行機による爆弾攻撃」というような新義として慣用されていることが窺える。一方、中国語由来の旧義である「爆発する、炸裂する」（日国大』の語義(1)に相当する部分）はほぼ忘却されるようになったと判断できる。要するに、その時代以降における「爆撃」はほぼ完全に別な語に転用され、周知のような現代日本語の意味用法に至ったと考えられる。

5　中国語への逆輸入およびその後の影響

２章でも述べた通り、中国語における「爆撃」という語は、明代から清代後期にかけて用例が見られるものの、その用例は少数に留まる。また、日本語との接触、つまり前章に述べた「爆弾攻撃」のよう

23）山口造酒・上野義太郎『英和陸海軍兵語辞典』（明誠館，1910）。本稿は国会図書館所蔵のものを参照した。

24）岡倉由三郎『新英和大辞典』（研究社，1929）。本稿は国会図書館所蔵のものを参照した。

な新義用法の影響を受けるまで、その意味がほぼ旧来の「爆発する、炸裂する」に一貫しており、変化したことはないと判断できる。

さらに、前章の分析検証によって、日本における新義転用の時期は1910～1920年代の間であることが明らかにされたため、上記のような接触と影響受けもその以降であろうと思われる。

そこで、近代中国において代表的な新聞である『申報』[25] の資料を用いて、「爆撃」とその関連語彙の使用状況について調査を行った。調査によれば「爆撃」の用例は1920年以降から見られるが、少数に留まっており、代表例として以下のものが挙げられる。

（22） 秦皇島與吳佩孚商議之結果、親率軍艦數隻向葫蘆島攻擊、欲斷奉軍後路、中途被奉軍飛行機爆擊。『申報』第18558号（1924/10/26）（訳：途中に奉天軍の飛行機の爆撃を受けた）

（23） 午前十一時、有爆擊機一架由北方飛來、向浦口抛擲炸彈數枚。『申報』第19421号（1927/4/7）（訳：一機の爆撃機が北方より飛来、浦口に爆弾数枚を投下）

（24） 我航空隊今早向深澤各渡口更番爆擊、敵衆紛亂。『申報』第20952号（1931/8/3）（訳：我が航空隊は今日早朝より深沢の各渡し場に対し反復爆撃を行い）

（25） 飛翔於敵艦之上、乘勢爆擊敵艦。『申報』第21386号（1932/10/20）（訳：隙に乗じて敵艦を爆撃する。）

『申報』（1872～1949）における「爆撃」および「爆撃機」の全用例は194例であるが、２章に挙げた例(1)～(5)のような旧来の意味用法に相当する例は存在せず、すべて例(22)～(24)と同じ、「爆弾攻撃」、「空中爆撃を行うための飛行機」のような用法に相当したものである。

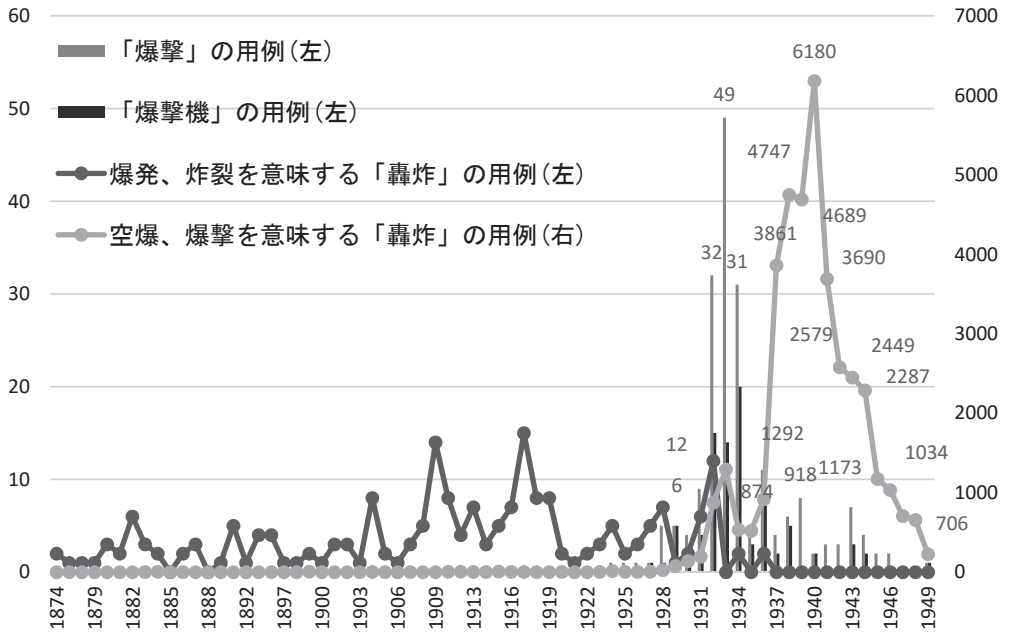
これらの中、特に例(22)に使われていた「飛行機爆撃」という短語表現に注目したい。「爆撃」だけならばまだ判断しにくいが、「飛行機」の方も日本語的な語彙要素であるため、「飛行機＋爆撃」とは日本語的な文面であると見られる。その現象についてすでに前述のように、明代から清代後期の間における「爆撃」の用例は少数であるため、その実際の使用率も高くない、極端に言えばその使用範囲は２章に述べた兵学、火薬製造関係文献に限定され、それ以外には広がることがなく化石化のような存在である可能性も窺える。これはいわゆる陳（2001）[26] に言う「その時代の断層を隔てた語」および「古典本来の用法との間にずれが生じている語」に相当したと思われる。そうであれば、上記のような1920年代における新語としての使用も恐らく単なる日本から来た時事用語、流行語のような存在であろう。従って、例(22)のような日本語の新義用法を直接借用した例も見られる。要するに、旧来の使い方が消滅に近いため、借用する際にして古語との関連性を想起することがなく、意味の混乱を起こす心配もないからである。

次の図-１は「爆撃」およびその関連語彙との比較した結果を示している。これらのうち、すでに述べられている「爆撃」及び「爆撃機」の使用例数はの棒線部分に示されているように、30年代初期をピー

25）北京愛如生数字化技術研究中心編『申報』データベース（関西大学アジア文化センターよりアクセス　最終確認日：2016･11･14）

26）陳力衛『和製漢語の形成とその展開』（汲古書院，2001）（p.268）

クとして、それ以降は使用頻度が低下している傾向が見られる。最終的な結果として、「爆撃」は１章で述べられている通り、現代中国語として定着せず、「轟炸」に置き換えられていると見られる。



（注：図中の凡例説明における（左）（右）とは縦座標のことを指す。それぞれ左側縦軸、右側縦軸のデータを基準とする）

図−１　『申報』における「轟炸」と「爆撃」の用例数の比較

従って、「轟炸」という語についても少し触れることにする。現代中国語の「轟炸」は日本語にいう「爆撃、空爆」の意味の相当する語[27]であり、またその派生語として「轟炸機」もあり、「爆撃機」に対応していた語である。しかし、近世の清代から近代にかけて、次の例(26)(27)のような使い方も見られる。

（26）　安置水下、甚為危險、稍不合法、即行轟炸。　清『中西兵略指掌』巻十六軍器六　（訳：すこしだけの不安定でも爆発する恐れがある。）

（27）　見此凶險機器、戰爭所不能免、須防其轟炸自傷。　清『時務通考』巻九　兵政八　（訳：自爆の恐れを注意しなければならない）

また、前述の英華字典資料類に属す『英華大辞典』（1908）[28]では、Explodeの訳語に「轟炸」が充てられたことに注目したい。当辞書からExplodeの項目を抜き出して示すと下記のようになる。

27）『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社，1986）による語義付け：従飛機上対地面或水上各種目標投擲炸裂弾（訳：飛行機を使用し、地面あるいは水上目標に対し爆弾攻撃を行うこと）。

28）顔恵慶『英華大辞典』（商務印書館，1908）

Explode, *v.i.* 1 To burst with violence and a loud report, 炸裂, 轟爆, 轟發, 崩裂；as, the gun-power explodes, 火薬轟炸；2.To detonate, 爆出, 爆裂（以下略）

以上の用例を比較したところ、「轟炸」の転用経緯はほぼ「爆撃」と同様に、20世紀以降には「飛行機による爆弾攻撃」という新義が付与されたが、それまでは同じ「爆発、炸裂」の意味として長く使われていたことがわかる。

そして、『古籍庫』における用例数の統計比較によれば、「爆撃」が14例に対して「轟炸」の方は47例に至っている。また、前述のように「爆撃」の用例はほぼ明代の文献に集中しているに対して、「轟炸」の方は清代特に晩清時代の文献より多くの用例が発見できることから、「爆撃」より後の時代から成立したと思われる。

一方『申報』における「轟炸」の使用変化についても調査を行い、その意味用法を整理すると、図-1の折れ線部分のようである。

そして、前述の例(26)(27)のような旧来の意味（爆発、炸裂）に相当する『申報』の用例に関しては、以下のものが挙げられる。

(28) 午前十點鐘時、火薬忽然轟炸。『申報』第10043号（1901/4/6）（訳：火薬が突然爆発した）

(29) 北軍敷設之水雷、昨有一枚自行轟炸。『申報』第16386号（1918/9/28）（訳：昨日、北軍が敷設していた水雷の一枚が自爆した）

以上の例(28)(29)のようなものにおいて、全体的の数は多くない（一番用例数の多い年でも10数例に留まる）ものの、図-1に通して、『申報』創刊時期の1870年代初頭から1930年代に渡ってその用例が連続に見られるようである。つまり、1920年代までにおける「轟炸」は基本前述の例(26)(27)と同じように「爆発、炸裂」の意味が継続されていると見られる。

ところで、1920年代以降では以下のような「飛行機による爆撃」の新義に相当する例が見られた。

(30) 絶未聞有飛機可轟炸於千里之外者。『申報』第18527号（1924/9/24）（訳：千里外の物を爆撃可能な飛行機の存在は前代未聞である）

このような用例に関しては、図-1の右端に示した通り、20年代後半から30年代初頭にかけて急増し1000例以上に延べ、例(27)(28)のような旧来の意味に相当する例の数を大幅に越えたのである。

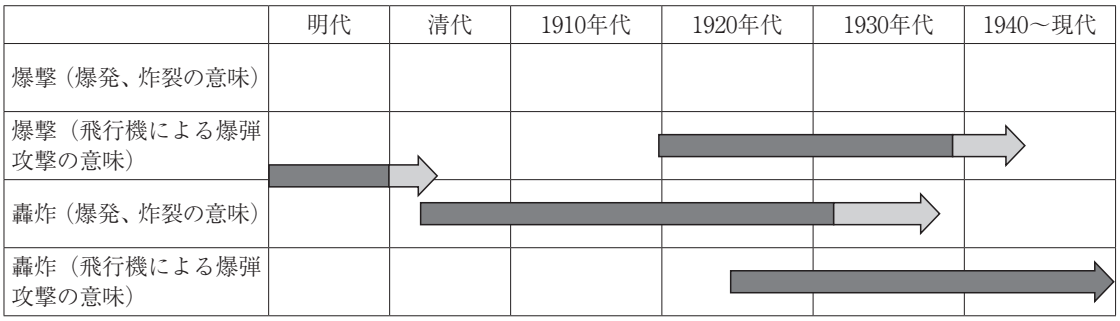
また、1920年代から1930年代前半にかけての「轟炸」の意味用法は、旧来の意味と新しく発生した「飛行機による爆撃」としての意味が混在しており、重層構造になっていると思われる。しかし、1930年代後半、恐らく日中戦争が勃発したことも理由の一つだと思われ、「飛行機による空爆」の関連記事が増加によって「轟炸」の用例がさらに急上昇、数千例までに昇ったことが見られる。

これに対して、同じ時期から「爆発」、「炸裂」という旧来の意味に相当する例が見られなくなる。前頁にも述べた通り、現代中国語の「轟炸」は日本語の「爆撃」に相当した語であり、「火薬轟炸」、「自行

轟炸」のような旧来の使い方が消滅したと見られる。以上の調査分析の結果によって、その新旧両方意味の切り替え時期は恐らく1930年代であることを言えよう。

以上の内容によれば、中国語としての「爆撃」及びその関連類似語である「轟炸」両方の変遷経緯を判明したと思われる。二語が同様に持つ新、旧意味を整理し、その変遷時期を示すと、図-２のようになる。

図-２　中国語としての「爆撃」及びその関連類似語「轟炸」の変遷



（注：■の部分は中断なく継続的に使用されていることを、□の部分は断続的で、あるいは消滅、死語に近い存在をそれぞれ表す）

図-１と図-２に示した内容を合わせて見ると、次のようなことが指摘できよう。

まず、「爆撃」と「轟炸」は中国固有語としても同じ意味を持っている。しかし、「爆撃」の方は前述にいう「化石化」、「その時代の断層を隔てた」の理由から、日本語側の「爆撃」が還流するまで、近代中国語にとってはやや見慣れない存在だと考えられる。それに対して「轟炸」の方は近世清代から継続的に使用されて、中国人にとっては馴染みのある語である。

そのためか、1920年代以降同じ「飛行機による爆弾攻撃」という新義の用法が現れた後にも「轟炸」の方が優位を維持したのではないかと想像される。また、新義としての「爆撃」を言えば普通その「爆撃手段」を表す派生語である「爆撃機」の方もよく想起される。しかし、その「爆撃機」はもしそのまま中国語の音声に転写すればbào jī jīというようなやや発音しにくい語になってしまい、中国での普及にとっては不利な点となるだろう。

以上のような二つの理由があるため、最終的の結果として「轟炸」の方が日本より還流した語である「爆撃」を圧倒し、現代中国語における「飛行機による爆撃」の意味に相当する語として定着したのであろう。

しかし、前章にも述べた通り、「爆撃」の方は1910～1920年代の日本により先に上記のような新義への転用したことは無視できない点である。また、図-１の右の部分を合わせて見ると、「轟炸」の方は「爆撃」よりやや後の時期に新義への転用例が多く現れたことがわかる。その点について、「爆撃」とは同じ「爆発、炸裂」から「飛行機による爆弾攻撃」への転用方法の影響、つまり日本語の影響を受けた可能性もあることを言えよう。

おわりに

本稿は、中国の漢籍に由来する漢語である「爆撃」の意味変遷、さらにその語における日中両言語間の移動に連動させられたいくつかの影響を考察した。結論として「爆撃」その語の伝播パターンを示すと、図-３のようになる。

図-３　日中両言語間における「爆撃」の伝播パターン

	中国語	日本語
近代以前	A 爆発、炸裂	A 爆発、炸裂
近代以降	（A）爆発、炸裂 （B）爆弾攻撃	（A）爆発、炸裂 B 爆弾攻撃

（後に衰退、定着に至らなかった）　（現代日本語に至る）

（注：A は中国固有語由来の旧義であるに対し、B は転用が発生した後の新義である。なお、（　）を付けたものは衰退、消滅した部分を示す）

簡単にすれば、まず「爆撃」という漢語の伝播ルートは中⇒日⇒中の伝播パターンであることが明らかにしたことを言える。中⇒日の段階は明代を漢籍兵学書に通して日本に伝わった可能性が高いと見られ、そして近代的な新義「飛行機などによる爆弾攻撃」の付与は1910年以降の日本によるものである。

その後、日本の方はそのまま新語として活用し、現代に至った。一方、1920年代頃の中国でも日本語の影響を受け、時事用語、流行語として「爆撃」を逆輸入し、1930年代頃までの短期間の間で使用していた記録が残されている。しかし、後には５章に述べた理由によって同義の「轟炸」に取って代われ、現代中国語においては定着に至らなかったと見られる。

しかし、中国への逆輸入時期では、「轟炸」がまだ現代中国語のような「爆弾攻撃」の意味に転用されていない、むしろその転用、及び新語として使用率の上昇は「爆撃」が中国語へ還流した直後であることは無視できないと思われる。

「爆撃」と「轟炸」は両方同じく中国の漢籍に見られる古典語であり、しかもその古典語としての意味もほぼ同義語に近い。本来ならば、意味の近い語彙を同じ新概念に付与させる場合、先にできたものが転用新語として定着しやすい、そして後からできたものは別の意味として住み分けか、あるいは衰退するかが普通だと思われるが、上記の二語の場合、後からできた「轟炸」の方が勝ち残るという現象は一見イレギュラーでもある。しかし、図-２に示した転用が発生するまでの近世清代における二語の実際使用率および現代中国語として語感上のギャップについても着目すれば、上記のような現象をもたらす理由を解明することも可能であると考える。

上記のようなことがあるため、今後はそれと類似した漢籍由来の転用語同士、または漢籍語と新規造語との比較、さらに中国固有語との対照比較を行い、その相互関係についてより広い視野でポイントを捉え、より深い考察によって問題の所在を明らかにする必要があるだろう。